

# OFF ENTERTAINMENT GUIDE

## INDEX

### CLOSE-UP

——“見られる”ことの苦痛

### SPORTS

——新システムを有効利用

### CONCERT

——本物を間近で体感する

### STAGE

——天才が抱えた間に迫る

### CINEMA

——思いを伝え合う躍しき

### ART

——活気ある芸術家の巣窟

## GLORIOUS - UP

### 静かなポर्टレートの主人公たち その眼差しに我々は何を答えるのか

『渡邊博史／See Angels Every Day』私は毎日、天使を見ています。

エクアドルの首都キトにある、サン・ラザロ精神病院。この写真集のタイトルは、その住人であるひとりの女性から発せられた言葉だ。

1751年に建てられたコロニアル様式の病院にはホームレス、精神病患者、ハンセン病患者、家のない見捨てられた子どもたちが暮らしている。サン・ラザロとは聖書に書か

れているハンセン病患者の救済者の名前だそう。

ホールの椅子にひとり座る男、食堂だろうか、壁に描かれた静物画、ビロティで裸足のままブリキのコップで水を飲む女、手術室の台に置かれた医療器具。6×6判で撮られた温黒調のモノクローム写真からは、住人たちの穏やかなたたずまい、物も人と等価なものとして扱られた場所の静けさが伝わってくる。

それなのに、これらの写真を見る者の気持ちの裏には、ザラザラとしたものがこびりつき始める。なかなか見終えてしまうことができない。そして、彼らを見ることは、彼らからこちらも見られているということに気付く。そこからくるザラザラ感（あなたは何をし、何を見ているのか）。そんな問いが聞こえてくる。

写真家・渡邊博史は病院を訪れ、その撮影行為において「撮ること」は、その被写体からも見られることにはかならない、と気付いたはずだ。「見られること」は絶えず苦痛を伴う。渡邊は、この「見られること」からくる、自身の気持ちの起伏やア

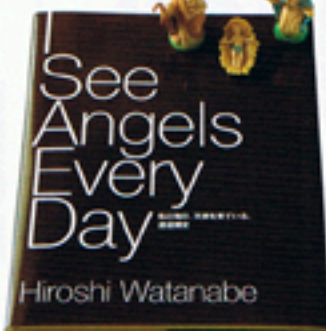
レといった苦痛に耐えた。彼らを撮るために。先の穏やかさや静けさは、この苦痛を通過した者にしか表現できないものである。時に宗教画を見ているような感覚に陥るのは、そのことに起因しているのだろうか。

渡邊は彼らのポर्टレートを撮る前に、こんな写真を撮りますよ、という意味でポラロイドを撮り、それを彼らにあげた。すると、ポラロイドに見入ったまましばらく顔を上げない人がいた。長い病院生活の中で自分の写真やアルバムを持っていない人たちは、そこに写し出された自分を見て、初めて髪が白くなったことや、歳をとったことに気が付き、驚く。その姿に、自分のほうこそ驚いたと渡邊は振り返る。

自分が歳をとり、他人を忘れ、自分を忘れ、いつしか自分が愛した家族の顔までも憶えていなくなった時、そこにいるのは自分の肉体を持った赤の他人だ。そうなった時には役に立たないだろうが、それまで写真は、自分が自分であることを何度でも思い出させてくれるものだと言っている。渡邊が、見られる苦痛に耐えられたのは、彼らが彼らであるため、それと同じように、渡邊がずっと渡邊であるため。

この病院には教会が併設されている。教会とは、神を見ようとする者が神から見られる場である。

「私は毎日、天使を見ています。」私たちがその暮らしの中で、何を見ているのだろうか。



わたなべ・ひろし ● 写真家。北海道出身。1975年日本大学芸術学部写真学科を卒業後、ロサンゼルスに移住。93年UCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）でMBA修士号を修得。95年頃から個人的な作品として写真を撮り始め、2000年から本格的に活動。以来アメリカで多数の個展を開催する。窓社刊、3990円。